

## 韓国語から見た対照言語学の可能性 : 日韓対照言語学的思考の系譜と展望

辻野, 裕紀  
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4491642>

---

出版情報 : East Asian Journal of Studies on the Japanese Language & Culture. 29, pp.1-9, 2021-01-05. East Asian Society of Studies on the Japanese Language & Culture

バージョン :

権利関係 :

# 韓国語から見た対照言語学の可能性

— 日韓対照言語学的思考の系譜と展望 —

辻野 裕紀

九州大学大学院准教授  
tsujinoy@flc.kyushu-u.ac.jp

本稿の目的は、日本における日韓対照言語学の研究史を概観し、今後の展望を述べるところにある。2000年代以前と2000年代以降とに分けて、それぞれの日韓対照研究の流れについて整理し、併せて向後の対照言語学の可能性についても言及する。

キーワード：対照言語学、日韓対照言語学、日本語、韓国語、研究史

## 1 序言

本稿は、主に日本における日韓（日朝）対照言語学の研究小史を粗描し、向後の展望を洞見するものである。

対照言語学は、その濫觴からして、言語教育と密接な関係がある。「外国語としての英語教育」に貢献しようとする実践的・教育的な動機から第二次世界大戦後のアメリカに始まる、比較的新しい学問分野と云いうる。その嚆が18世紀後半のウィリアム・ジョーンズにまで遡り、19世紀には、ラスムス・ラスク、フランツ・ボップ、ヤーコプ・グリムらが出現、さらには、1870年代のライプツィヒ大学を中心とする青年文法学派によって洗練されていった比較言語学（歴史言語学）の歴史と比べれば、対照言語学がいかに新しいか、よく分かるであろう。しかし、戦後のアメリカ以前にも、2言語間の対比を行なった研究は絶無ではなく、バイイ（フランス語とドイツ語）、ポリワールフ（ウズベク語とロシア語）、イサチェンコ（スロヴァキア語とロシア語）、マテジウス（チェコ語と英語）の研究などが夙に存在していた。就中、マテジウスの理論は重要で、言語外現実を名づける〈命名論（オノマシオロジー）〉と命名された単位をより高度の単位へと組み上げていく〈機能的統語論〉を全ての対照の基礎としているのは注目される。アメリカに誕生した対照言語学以前

に、こうした前史があったことは言及されておいてよいだろう。

構造言語学や行動主義心理学を理論的基盤とした初期の対照言語学においては、母語と目標言語の相違点が母語干渉、転移を齎すため、学習上の困難は予め予測しうるものと牧歌的に考えられていた。フリーズやラドーなどといった研究者がよく知られている。しかし、こうした〈対照分析〉が予言する困難点は実際のエラーとして現れないことも多く、研究者たちは〈対照分析〉から〈誤用分析〉へと操舵していくこととなる。また、チョムスキーの生成文法の隆盛も相俟って、対照研究のありようも次第に変容していく。

日本における対照研究は、「外国語としての日本語教育」の必要性から、1970年代半ばに始まる。これは、日本の高度経済成長を背景に、日本語を学ぶ「外国人」が増えてきたということと関わりがある。日韓対照研究については、1980年代から本格的に行われるようになる。

一方で、日本における韓国語＝朝鮮語研究は、「対照研究」と銘打たずとも、日本語学の手法や成果を援用したり、日本語と比考したりするなど、対照言語学的な思考が仄見えるものも少なくない。南（1974）の影響が窺える、韓国語の文の構造を論じた野間（1997）や、情報のなわ張り理論を用いた、韓国語のモダリティ研究である平（2004）など、枚挙に遑がない。また、伊藤英人氏のテンス研究や、趙義成氏の格をめぐる一連の研究など、東京外大系の研究者の論考には、特に奥田靖雄をイデオログとする言語学研究会の影響もしばしば見取れる。

斯くして、日本語母語話者による現代韓国語研究は、問題関心や研究手法等によって濃淡こそあれ、対照言語学的な色彩を帯びやすい。日本語で思惟し、日本語で韓国語を記述するという営為自体が対照言語学的思考の契機を本質的に内包しているとも言える。これは、日本語を深く存知する韓国語研究者の研究上の優位性となる。

そして、日韓対照研究の潮流は、日本語学のそれと同期している。後述するように、最近では、談話分析や語用論から見た日韓対照研究が目立つ。

## 2 日韓対照研究小史

### 2.1 2000年代以前

日韓対照研究の萌芽は、泉井（1967）、浜田（1969、1970）である。塚本秀樹（1997: 38）によれば、日本における日韓対照研究の半数近くが文法に関するものである。

具体的には、格助詞、助詞「は」「が」と「nun/un」「ka/i」、ヴォイス、アスペクト、テンス、動詞（特に「する」と「ha.ta.」）、授受表現、指示詞などが扱われてきた。

1970年代までは、指示詞や助詞「は」「が」と「nun/un」「ka/i」、ヴォイス、敬語などに関する論考が数篇発表されたのみであったが、それ以降、とりわけ、1990年代に入ると、日韓対照研究は量的に増加する。ただし、日韓両言語の異同をアドホックに指摘する、皮相的な対比にとどまるものも散見され、方法論の深化もあまり見られなかった。勿論、これは、どこまでも現在の水準から照射するとそのようにも見えるという評価であって、先賢の手になる斯かる研究の土台があつてこそ、現在のより深い研究が存在するという事は弭忘してはなるまい。90年代までの日韓対照研究、韓国語研究は、国立国語研究所（1997ab）がその集大成と言えよう。90年代の研究テーマについては、それ以前から着目されてきた、指示詞や助詞、そして、テンス、アスペクト、ヴォイスといった文法範疇論に関するものが多かった一方、言語行動など、社会言語学的な研究も漸次、現出し始め、こうした関心は2000年代以降の研究群に承継されていく。

## 2.2 2000年代以降

2000年代に入り、日韓対照研究の対象や方法論が大きく変容し始め、新たな味爽を迎える。生越直樹編『対照言語学』（東京大学出版会、2002年）、油谷幸利著『日韓対照言語学入門』（白帝社、2005年）のような、韓国語学の泰斗による対照言語学プロパーの単行本も編まれる。2007年に第1巻が上梓された、野間秀樹編著『韓国語教育論講座』（全5巻、くろしお出版）所収の論考の殆半や、〈言語の形而上学〉に随伴する思辨の皮膜を剥離しつつ、物自体（カント）ならぬ、〈言語それ自体〉の姿を雄勁な筆致で諄々と説いた、野間秀樹著『言語存在論』（東京大学出版会、2018年）なども、日韓対照言語学的な観点が貫かれた、推重すべき著作である。塚本秀樹著『形態論と統語論の相互作用 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』（ひつじ書房、2012年）も重要である。これらはいずれも、日韓両言語の差異を熟思するための必携の書と言ってよい。

90年代までは、形態素や単語、文のような比較的微細な単位を対象とする文法研究が主流であったが、2000年代に入ると、90年代までの文法研究を基盤としつつも、文よりも大きな単位である談話＝ディスコースを視圏に入れた研究へと関心が遷移していった。代表的なものとしては、「非述語文」を鮮明に位置づけた金珍娥（2013）や、中途終了発話文を扱った高木（2018）などを挙げうる。談話研究の価値は、文

を超えた、より巨大な単位を研究の俎上に載せるということのみならず、従前の研究で十全に客体視されていなかった〈話されたことば〉の姿態を活現させ、延いては〈書かれたことば〉とのオントロジカルな非対称性を顕現させるところにも存する。

語用論的な研究も隆盛している。例えば、堀江・金廷珉（2011）などがある。意味論と語用論の差異を、〈脱文脈化／文脈化〉という概念装置で素朴に把握するならば、語用論的研究を標榜する以上、当然のことながら、文よりも大きな単位で言語事象を剖析せねばならず、この点で語用論研究と談話研究は一脈相通ずる。こうした研究上の志向性の変化は、〈局在主義的言語観〉から〈ホリスティックな言語観〉へのシフトと見てもよいだろう。言語教育の側面に照らせば、〈部分的最適化〉が〈全体的最適化〉を齎さないことへの開眼とも言える。

金恩愛（2003）を嚆矢とする、〈表現様相論〉の出現も看過してはならない。金恩愛（2003）は、梅田（1982）、生越（2002）などが関心を寄せた、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造を豊富な実例とともに精緻に描出している。表現様相論の核心は、端的に言って、〈文法的適格性〉ではなく、〈表現の志向性〉という扱いにくい、しかし言語にとって極めて重要な論点を正面から見据えんとするところに在ると言ってよかろう。正文／非文という伝統的な二分割思考、二極思考から脱却し、表現の自然さ＝志向性への着眼に至ったことは表現様相論の大きな功績だと思われる。夙に北嶋（1977）が論及した「使用頻度の相違」や林八龍（1995）の「表現構造」などといった思考の水脈の到達点である。

社会言語学的対照研究も盛んである。分けても、「ほめ」をめぐる金庚芬（2012）は、非常に興味深い。日韓の言語行動、非言語行動の差異を焙り出した読み物としての任榮哲・井出（2004）も貴重である。こうした著作から得られる知見は、いわゆるプラグマティック・トランスファーの防遏にも繋がり、円滑なコミュニケーションの実践に資するものとしての価値も認められる。

文法論的考査も湮没せず、今猶堅緻に行われている。混成語形成の形態論を扱った辻野（2010b）、条件表現の金智賢（2018）、接続表現の池玫京（2018）など、様々な論考が公刊されている。

方言や非現代語を視野に入れた対照研究もあり、堀江他（2004）、高田（2006）、辻野（2010a）、円山（2016）、安平鎬・福嶋（2005）などを挙げうる。

通言語的、言語類型論的な視座に立った研覈もある。対照言語学やその隣接領域には、認知類型論、語用論的類型論、歴史語用論、歴史社会語用論、対照語用論、

解放的語用論など、連字符社会学（カール・マンハイム）ならぬ、「連字符類型論」、「連字符語用論」とでも汎称すべき混質的なディシプリンが陸続と誕生、櫛比し、百家争鳴の様相を呈している。例えば、認知類型論から見た存在論的中間的構文（主要部内在型関係節）、文法化、主観化・間主観化、名詞と動詞の連続性（堀江・パルデシ 2009）などのトピックが論じられている。対照研究と通言語的研究をめぐっては、井上（2014）が示唆に富む。

日韓対照研究関連の論文は、他にも許多発表されているが、紙幅の関係で茲にその全てを紹介することは当然できない。文献リストとしては、国立国語研究所（1996）、また、塚本秀樹（1997）、油谷（2005）、辻野（2012）などに付された参考文献が至便である。

### 3 展望と課題

現在、日韓対照研究は、以前ほどは活発ではない。その要因としては、韓国からの留学生が減っている、韓国にいる研究者にとって日本の学会誌への投稿が研究業績として評価されないなどといった研究外的な問題が挙げられる（生越 2018: 6）。斯かる研究の現況を再び賦活させるためには、もともと寡少な、日本語を母語とする研究者の育成が焦眉の課題と言える。塚本勲（1997:133）は、日本の学生や院生たちへのメッセージとして「イエスペルセンになれ」と書いているが、このことは拳拳服膺したい。言語的に英語と近い距離にあるデンマーク語を母語としたイエスペルセンが最大の英語学者となったように、日本語母語話者は誰も、倦まず弛まず勉めれば、尤なる韓国語研究者となる可能性を潜有している。その可能性を具現化するためには、韓国語と類型論的に相似した母語たる日本語、そして日本語学にも関心を持ち、常に日韓対照言語学的な視座から韓国語を諦視するという構えが大切であろう。

巨視的な視座に立脚した対照類型論的考究も大いに歓迎されるべきである。日本語や韓国語を粗視化することで、闡明される言語事実も少なくないであろう。しかし、当該言語の運用能力のない研究者＝語感のない研究者が対象言語にどこまで深く肉迫できるのかという疑念は拭いきれない。例えば、表現様相研究で展開されている議論のように、「日本語らしい用例」、「韓国語らしい用例」を選択的に提示しつつ、日韓両言語の表現の態様を活写し、その差異をありありと見せてくれるような

論文は、日本語と韓国語の双方を等しく知悉していなければ到底物し得ないであろう。「面白い」対照研究を行なうには、両言語の運用能力と広範な言語学的な知識に加え、ある種の「センス」が必要になってくるのではないか。そして、それもまた運用能力の巧拙と言語学的知識の多寡にある程度比例するのではないか。理論傾斜の研究も言語学には必要だが、言語事実をひとつひとつ丁寧に拾い上げ、それらを有機的に結び付けていく「現象横断的」(井上 2014) な研究こそが面白いと筆者は愚考する。

また、対照研究には、両言語の語史に関する深識も不可欠である。これについては、辻野 (2020) でも簡単に言及した。

こうしたことを顧慮すると、対照研究はひとりの研究者では場合によって限界があると思われる。それぞれの言語の高い運用能力と語感を有し、語史にも通暁した専門家たちの共同研究も時に必要となってくるであろう。

最後に、明るい話題として、当今、韓国文学の日本語翻訳書が加速度的に増えていることを附記しておく。CUON、晶文社、新泉社、書肆侃侃房などといった出版社は、韓国文学のシリーズも刊行している。これまでは日本文学の韓国語翻訳書のほうが、韓国文学の日本語翻訳書に比べて、圧倒的に多かったが、その非対称性が少しずつではあるが解消されつつあると言ってよい。このことは、韓国語を〈基準言語〉、日本語を〈対照言語〉とした対照研究の遂行が易化することを意味する。翻訳書の増量によって、対照研究がより容易となり、その一方で、対照研究の成果がよりよい翻訳(書)を産出するための基盤となっていくような、言語学と文学の新たな好循環が生成されていくことを庶幾しつつ、擲筆する。

\*本稿におけるハングルのローマ字翻字は、Yale 式に拠った。ただし、読みやすさを考慮し、ハングルの文字境界にはピリオドを付した。

### 参考文献

- 安平篇・福嶋健伸 (2005) 「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系：存在型アスペクト形式の文法化の度合い」, 『日本語の研究』1-3, 日本語学会
- 泉井久之助 (1967) 「二重主語の構文と日本語」, 『言語の構造』, 紀伊國屋書店
- 井上優 (2014) 「対照研究と通言語的研究」, 定延利之編著『日本語学と通言語的研究との対話：テンス・アスペクト・ムード研究を通して』, くろしお出版
- 林八龍 (1995) 「日本語と韓国語における表現構造の対照考察：日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として」, 『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』, 明治書院

- 任榮哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラク：ことばと文化の日韓比較』, 大修館書店
- 梅田博之 (1982) 「韓国語と日本語：対照研究の問題点」, 『日本語教育』 48, 日本語教育学会
- 生越直樹 (2002) 「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方：「きれいな花！」タイプの文を中心に」, 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, 東京大学出版会
- 生越直樹 (2018) 「日韓対照研究の実践と課題：名詞文の使い方を例に」, 『日本語学研究』 57, 韓国日本語学会
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 三省堂
- 北嶋静江 (1977) 「日本語朝鮮語対照言語学の展望」, 『朝鮮学報』 85, 朝鮮学会
- 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」, 『朝鮮学報』 188, 朝鮮学会
- 金庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』, ひつじ書房
- 金珍娥 (2013) 『談話論と文法論：日本語と韓国語を照らす』, くろしお出版
- 金智賢 (2018) 『現代日本語と韓国語における条件表現の対照研究 語用論的連続性を中心に』, ひつじ書房
- 国立国語研究所 (1996) 『朝鮮語研究 (朝鮮語母語話者に対する日本語教育) 文献目録：国内文献及び欧米文献 (1945～1993)』, 国立国語研究所日本語教育センター第四研究室
- 国立国語研究所 (1997a) 『日本語と外国語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語 上巻 回顧と展望編』, くろしお出版
- 国立国語研究所 (1997b) 『日本語と外国語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語 下巻 研究論文編』, くろしお出版
- 佐藤滋・堀江薫・中村渉編 (2004) 『対照言語学の新展開』, ひつじ書房
- 平香織 (2004) 「終結語尾 ‘-ci’ の意味と用法：情報のなわ張り理論の観点から」, 佐藤滋・堀江薫・中村渉編 (2004) 所収
- 高木丈也 (2018) 『日本語と朝鮮語の談話における文末形式と機能の関係 中途終了発話文の出現を中心に』, 三元社
- 高田祥司 (2006) 「日本語東北方言と韓国語の対照研究の可能性」, 『日本語文法』 6-2, 日本語文法学会
- 千野栄一 (2002) 『言語学 私のラブストーリー』, 三省堂
- 池政京 (2018) 『接続表現の多義性に関する日韓対照研究』, ひつじ書房
- 塚本勲 (1997) 「日本の朝鮮語観：体験をふまえて」, 国立国語研究所 (1997a) 所収
- 塚本秀樹 (1997) 「日本語と朝鮮語の対照研究」, 国立国語研究所 (1997a) 所収
- 辻野裕紀 (2010a) 「日本語東京方言と韓国語大邱方言の音調についてのアクセント論的考察：アクセント体系と出現頻度, 類型論」, 『日本学報』 84, 韓国日本学会 【韓国語文献】
- 辻野裕紀 (2010b) 「現代韓国語における混成語形成の形態論」, 『日本語学研究』 29, 韓国日本語学会
- 辻野裕紀 (2012) 「日本における日韓対照研究の展開：文法研究を中心に」, 韓国日本語学会編 『日本語学研究の最前線』, 図書出版チェックサラン 【韓国語文献】
- 辻野裕紀 (2020) 「名詞と動詞のあわい：日韓対照言語学の視角から」, 『言語文化論究』 45,



九州大学大学院言語文化研究院

日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』, 大修館書店

野間秀樹 (1997) 「朝鮮語の文の構造について」, 国立国語研究所 (1997b) 所収

浜田敦 (1969) 「尊敬と謙譲」, 京都大学文学部国語学国文学研究室編 『国語国文』 38-11, 中央図書出版社

浜田敦 (1970) 「「が」と「は」の一面」, 『朝鮮資料による日本語研究』, 岩波書店

堀江薫 (2016) 「対照語用論」, 加藤重広・滝浦真人編 『語用論研究法ガイドブック』, ひつじ書房

堀江薫・金廷珉 (2011) 「日韓語の文末表現に見る語用論の意味変化：機能主義的類型論の観点から」, 高田博行・椎名美智・小野寺典子編著 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』, 大修館書店

堀江薫・近藤絵美・姜奉植・守屋哲治 (2004) 「関西方言の否定形式交替現象に関する認知言語学的研究：韓国語との対照に基づいて」, 佐藤滋・堀江薫・中村渉編 (2004) 所収

堀江薫・パルデシ, プラシャント (2009) 『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』, 研究社

マテジウス, ヴィレーム (1981) 『機能言語学：一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』, ヴァヘク, ヨゼフ編, 飯島周訳, 桐原書店 【原著は1975年刊行】

円山拓子 (2016) 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』, ひつじ書房

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店

森山新 (2000) 「対照研究と韓国における日本語教育」, 『同日語文研究』 15, 同日語文学会

油谷幸利 (2005) 『日韓対照言語学入門』, 白帝社

## 한국어에서 본 대조언어학의 가능성

—한일대조언어학적 사고의 계보와 전망—

쓰지노 유키

본고의 목적은 일본에서의 한일대조언어학의 연구사를 살펴보고 앞으로의 전망을 기술하는 데에 있다. 2000년대 이전과 2000년대 이후로 나누어 각각의 한일대조연구의 흐름에 대해서 정리한 후, 향후의 대조언어학의 가능성에 관해서도 언급한다.

**핵심어** : 대조언어학, 한일대조언어학, 일본어, 한국어, 연구사

### 著者紹介

辻野裕紀 (つじの・ゆうき): 九州大学大学院言語文化研究院言語教育学講座准教授  
〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744 九州大学大学院言語文化研究院  
tsujinoy@flc.kyushu-u.ac.jp  
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。  
言語学、韓国語学、音韻論、言語思想論。